

---

# Joyful Joker

ロドリゲス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

J o y f u l J o k e r

### 【Nコード】

N 1 7 1 4 D

### 【作者名】

ロドリゲス

### 【あらすじ】

時は西暦2115年。サイバー化技術が発達した近未来。日本を支配する超大手企業たち。乱立するビル群。その影を疾駆する少女達…。己の肉体を冷たき金属に替え、自らの脳に手を加え、企業家たちの走狗となりて、剣林弾雨の中にて踊る！サイバーパンク小説、ここに始まる！

001 1-01 SR Start・Ready? (前書き)

は、初投稿です！文才無き自分がサイバーパンクというジャンルを扱うのは無謀と思いますが、どうぞ最後の最後まで読んでいただき、そして楽しんでいただけたら幸いです。

001 1-01 SR Start・Ready?

『ハ―イ、たった今聴いてもらったのは、今ノリにノッている『FF』の新曲『LONG, LONG, BLUE SKY』でしタ。ボーカルの『シルフ』ちゃんのボイスは、ホンツツツツにスツツツゴクきれいな声よねエ。コレツてサイバー化してなくて、天然モノだっというんだものねエ。もう羨ましいったらないワ！ じゃ、次の曲行くわヨ。次はあ 』

『5分前だよ。』

唐突に割り込んできた通信に驚くでもなく、少年はウェブ・ラジオ・プレイヤーの電源を落とし、耳に掛けていた骨伝導イヤホンを仕舞い、額に掛けていた多機能ゴーグルで、その勝ち気で挑発的な目元を覆う。

「もうそんな時間？」

いつもの癖で手元の時計で確認しようとして、ゴーグルに表示された時間に気付く。

『西暦2115年06月03日23時55分』

ゴーグルを通じて網膜に直接投影されている時間をみて、ため息を一つ。

『そう。もうそんな時間。』

通信相手の僅かな呆れを感じ取れたのは、付き合いの長さ故か。

『ちゃんと配置についてるの?』

相手の言葉に少年は辺りを見回す。

来栖市 北西部 地区 某社ビル屋上

そこが、少年が今立っている場所だ。

ビルが競い合うように乱立するオフィス街。その中でも少年の立っているビルは、それ程高くない。しかしそれでも高さは優に百メートルは下るまい。その中に入らずして屋上まで辿り着くとはいかなる業をもちいたものか。

「問題無し。ちゃんと配置についてるよ。」

しかし少年は自らが為しえた偉業を誇るでもなく、あくまでその態度は変わらない。

「それより歩は<sup>アユム</sup>？」

『歩ならさつき配置についたって、連絡がきたよ。』

一步。少年は屋上の縁に向かって歩を進める。

『歩ばやいてたよ。もつと自分向きな作戦は無かったのか、て。』  
「ハハ、そっぴや言つてたな、そんなこと。」

また一步、歩を進める。

外壁に向かつて進む様子に変化は見られず、通信……：ゴーストに内蔵されている機能の一つ……：を行う姿は極めて自然であり、会話を楽しむ様子は古今東西を問わずどこにでも見られるのである。

『そろそろ時間だね。通信を切るよ。頑張つてね、進<sup>ススム</sup>』

「ああ。それじゃまたな、<sup>カケル</sup>駆。」

通信を切る。そのときには少年……進はすでに縁の上に立っていた。

荒れ狂うビル風が容赦なく少年を襲う。ともすれば風に足元を取られ、ビルから落下しそうな状況下で、しかし少年の悠然とした佇まいは変わらない。

『23時59分』

愛想なくゴーグルを通じて網膜に直接投影された数字を読み取り、進は今の装備を改める。

腰の後ろには、愛用のナイフが鞘に収められ、その両脇には小物を入れるポーチ。服装はいつものように動きやすさに重点を置いたもの……黒のシャツに赤のラインの入った黒のズボンにスニーカー……にしてある。

準備は万端、整っている。あとは時が満つるのを待つのみ。

『10秒前』

時計が目標の時間に近づいたためカウントダウンを開始する。

『9…、8…、7…、6…』

進はほとんど無意識にナイフの柄尻に手をやる。少しだけ昂ぶっていた気持ちだが、落ち着いていくのを感じる。

『5…、4…、3…、』

僅かに息を吸い、

『2…、  
』

吐く。

『1…、  
』

そして、一瞬のためらいもなく進は、

『0…。  
』

やはり愛想なく表示された数字を尻目に、虚空にその身を投げ出した。

001 1-01 SR Start・Ready? (後書き)

ど、どうでしたか？あんまりサイバーパンクっぽく無い気がしますが、気にしない。ご意見・御感想および誹謗・中傷ヨロズ承っています。でも砂糖多めの甘々でお願いします。次回更新は、えー、来週ぐらいには出来たらいいなあ……。そんな希望をのたまうロドリゲスでした。



今回もあまりサイバーパンクっぽくないかも…。あと文章の構成も変えてみました。

ゴオウツッ!!

荒れ狂う風が耳朵をたたく。重力に捉われたその身は万有引力に従って、進の体は頭を下にして、落ちていく、落ちていく、落ちていく…。

「ーッ!」

意味もなく絶叫したくなる衝動を、歯を食いしばって耐え、タイミングを計る…。

「3…、」

程なくして最早お馴染みとなった数字が視界の端に表示される。

右手はビル側、左手は夜空にそれぞれ向け、空気抵抗を全身に受け、やはり落ちていく。右手を閉じて開いてウォーミングアップ完了。

「2…、」

右手に力を込める。

(右手・筋力増強…)

…すると、その手は、

「ーッ!」

大きく、強く、変化していく。

(右腕・筋力増強…)

その変化に耐えるように歯を食いしばる主人を尻目に、右手、そして右腕は変化し続け、今や元のサイズの二まわり程に変化していた。 「1…、」

と、視界の端に変化が現れる。

「」

行く先に赤い矢印が表示され、その示す先には壁面に設置された通気用ダクト。上から確認すると、雨よけの屋根が見える。…うん、邪魔。

右腕を曲げて構え…、

『0…』

(今ッ！！)

タイミングを合わせ通気用ダクト目がけて、一撃を放つ！

今まで散々風雨を凌いできた強化セラミック製の屋根は完全に破壊された。のみならず、通気用ファンもまたともに破壊された。

通気用ファンが壊れても異常が察知されないことは調査済み。通気が滞り始めれば別だが、それはしばらく先の話となるだろう。

右腕を無理矢理突っ込んだ、は良いが、減速を少しもしなかったので無理矢理速度を殺した反動が思いっきり右腕に来ることになる。

「……………」

三度目となる無言の絶叫。

しかしその一瞬後には眼前に壁が迫ってきた。

「いいッ!？」

単純な話、速度を殺したことはいいが、それは右腕のみの話であり、それ以外はそうではない。つまり…、

「ぬおおッ!？」

突っ込んだ右手を支点として速度が落ちていなかったそれ以外の部分、と言いか顔が壁面に衝突…

ダンッ！！

しなかった。間一髪のところ、両足と左手で顔を守ることに成功する。

しかし打ち据えた手足が痛いのか、くうう、とか、おおう、など呻き声が聞こえるが…。

下に落ちる前に右手で縁を掴むが、その手は徐々に元のサイズへと戻る。それに合わせて右腕の腕力やら右手の握力が低下していく。

「おっとつと…」

ここで落ちたらただの馬鹿だ。慌てて少々痛みの残る左手をダクトの縁に掛ける。そして体を狭い通気孔にねじ込む。体が完全に入ったところでようやく一息。

「ふう…、やれやれ、だ。」

この侵入方法に賛成したのは確かに自分だ。しかし他の方法は本当に無かったのだろうか。この作戦を立てた弟…三つ子なので上も下もないが…の駆に脳内で愚痴をこぼす。最も、そのおかげで中の警備部に気付かれていないのも確かなのだが。

…まあ、こんな手段で侵入されるとは思ってもいないだろうが…。  
「じゃ、行くとしますか…」

いつまで文句を言っても仕方ない。視線で多機能ゴーグルを操作し、このビルの立体マップを呼び出して自分の位置と目的地を確認。どうやらこの狭くて暗くて迷路のような通気路をしばらく動き回らないといけないらしい。

「……………」

やはり反対しておくべきだったと後悔しつつ、狭い通気路を這うように、否、這いつくばって進み始めた。

右腕は、完全に、元に戻っていた。

皆さんどうでしたか？次は新キャラこと歩が登場します。予定ですが！少しだけですが！…えー、ではご意見・御感想、及び非謗・中傷ヨロズ承っています。砂糖多めの甘々でお願いします。次回更新は来週の火曜日ぐらいを予定してます。では、皆さん風邪に注意してください。自分はすでになっっていて、今もなっっています（笑）。ロドリゲスでした。

003 1-03 SR Silent Runners・(前書き)

長いです。覚悟を決めてお読みください。：まあ、そんなに大げさなコトでもないんですが。あと中々風邪が治ってくれません(笑)。

薄暗い通気路を這うように移動してどれほど経ったのか。ゴーグルを通じて網膜に直接投影された時間を見てそれ程経過していないことに軽くショックを受ける。

多機能ゴーグルには低視光機能があるが、もとより暗闇を苦とする瞳ではない。この程度の暗さならゴーグル無しでも問題はない。だからといって外すわけにはいかないが…。

さらに通気路を進むことしばらく、暗闇に慣れた瞳が僅かな光を捉えた。

(お…、もしや…)

視線でゴーグルを操作しマップを確認。そこがこの迷宮の出口であることを確認。

(よっし…！)

俄然、力が籠もる。

匍匐前進を極めたのか、その速さは今までの比ではない。

ザザザザザ……

下からみれば不審極まりないその様子を幸いなことに咎める者はない。

光の元である、格子状のフィルターに手を掛け、慎重にそれを外す。

見事に音もなく外すことに成功すると、やはり音もなく飛び降りる。…足元を確認せずに。

『danger』

視界の端にそんな文字が踊るが時既に遅し。

『……………』

目の前の警備用ドローンの知覚センサーと目が合った。

(……………やべえ)

この警備用ドローンは全長140cmの円柱型というどこか愛嬌のある姿をしていながら、侵入者には警告しつつ、内蔵されている機関銃で対応し、あるいは警備部に無線で異常を知らせる機能が搭載されている。

「……………」

見つめ合うこと幾秒、しかしドローンは機関銃の掃射も、警備部への連絡を入れる事無く、自分の巡回経路に戻っていった。

「ふう、危ないトコだったぜい。」

ドローンが彼を認識しなかったのは、このビルの外にいる駆の卓越した電腦技術のおかげである。

いまこのビルの警備システムは駆の手の中にある。例えば先程のドローンの事もそうだが、今のやりとりを見ている監視カメラも既に駆に支配されている。延々と何事もない映像を警備部で待機している者達に見せていることだろう。

(さてと…、)

投影された立体マップで目標地点がまだ階下であることを確認、その足を静まり返った暗闇へと向けた。

\*\*\*

僅かな光に照らされた道を職務放棄した監視カメラに向かってVサインしたり、警備用ドローンに挨拶したりしながら進み、目標の階に、無事到着。目の前に前と右に分かれる角を確認してその足を止める。

立体マップには、この角を曲がった先に警備員が二人いることを示すアイコンが表示されている。

『3…、』

久々に表示された数字。しかし慌てることは、ない。

『2…、1…、』



静かに息を整え、

『0...。』

躊躇わず飛び出した。

警備員が進の姿に僅かに動揺するも、それは一瞬。すぐに腰に提げていた拳銃を構え、少年に向ける。

だが、少年が囷であることに気付くこともなければ、ちょうど真後ろにある、天井の格子状フィルターが外されていることや、さらにそこから少女が両手に麻酔銃を持ったことが音もなく降りてきたことに気付くこともない。

パシユパシユッ！

遠慮せずに延髄に打ち込まれた小型麻酔銃で、昏倒する警備員二人を走り込んだ進が支える。

二人をそつと寝かせてから、進は降りてきた少女に目を向ける。

歳の頃は進と変わらないであろう少女は、上は動きやすく色気のないシャツに、下はチェツクのミニスカートにスパッツ、足元はスニーカーという格好で、何を思ったか倒れた警備員の銃に手を伸ばしている。

「…何してんの？」

「ん？万引き。」

呆れ返った進の問いに少女はゴーグルを付けた顔を向ける。先程の麻酔銃は既に後ろ腰のホルダーに収められ、代わりに銃を持っている。

手にした銃の作動チェツクを行う姿はとも少女とは思えない程、様になっている。

一通りチェツクを終わらせた少女は前を見つつ、

「それじゃ、お仕事の続きをしようか、進？」

と、自分の兄が三つ子なので上も下もないがに声を掛け、対して進は、

「ああ、そうだな…、歩。」

と、やはり前を見つつ自分の妹に言葉を返す。

ゴールは近い。

…その前に、

「歩、万引きは犯罪だよ。」

「うん、知ってる。」

ゴンッ！！

進は、とりあえず教育的指導（拳骨）を行った。

ようやく出ました新キャラ。無理矢理出した気がしないでもないですが。区切っても良かったんですが、これ以上ならだるなものな  
あと思い、繋いでみました。どうでしょうか？ご意見・御感想いつ  
でもお待ちしております。気軽にどうぞ。次回更新はやっぱり来週  
の火曜日を予定してます。ではロドリゲスでした。

004

1-04

SR

a

Sullen, but

Reliable

メリークリスマスです、皆様。本編とは何の関係もありませんが  
!!ようやく三兄弟が登場しましたよ。

『痛つ！なににも殴ることないじゃん！』

『黙らっしやい。そんなモン何に使う気だよ？』

『え！？…見つかったとき用？』

『見つかること前提かよ！？しかも、何心底不思議そうな面してんだよ！』

『いや、きつと進が失敗すると思って。』

『しかもオレかよ！？』

(…なにやってんだか)

監視カメラから流れてくる映像と音声を確認して、駆は頭を抱えたい気分になった。

駆がいる場所は来栖市C地区住宅街のどこにでもある普通のアパートの、やはり普通にある一室。しかしその中の様子はとても普通とは程遠い。囲むように配置された複数の端末、宙に浮く何十枚もの立体映像モニター。その中で椅子に腰掛け忙しく両手を動かす少年、駆。

はあ、とため息を一つ。

二人のやりとりを眺める瞳は流石兄弟と言うべきか、よく似ている。だが、中途半端に伸ばした髪と体のサイズに合わない大きめの服を着ているせい、受ける印象が大分異なっ見える。

このビルの警備システムの乗っ取りとその管理、及びビル外や回りの交通の状況確認。常人ならば三、四人がかりで行う作業を駆は一人で行っている。どころか、まだ余裕があったりする。

はあ、とため息をまた一つ、うなじに埋め込まれている端末接続プラグを掻く。

正直な話、二人のフォローこそが一番の面倒とも言えるのであった。

\*\*\*

「大体私にこんなの無理なのよね。こそこそするやつ。」

「少しは我慢しろ。オレだって我慢してんだ。」

「もつとこう、シンプルにいこうよ、シンプルに。」

「シンプル？」

「正面ロビーから車で突っ込んで、それから」

「アホか。」

「うわ、ひどっ！」

文句を言い合いながらも二人の疾駆する速度は変わらない。足音は見事に殺せているものの、二人の話し声が色々と台無しにしているが。

もつとも、この階には先程の警備員二人を除けば進と歩しかいないが。

「でもホント静かだね。」

「ああ、こうも静かだとかえって不気味だな。」

「恐いの？」

「…………。馬鹿言え。」

しかし言葉とは裏腹に、進の足の運びが遅くなった気がするが。

「なに、今の間？」

「き、気にするな。」

『二人ともちよつと』

「ホウワアアアッ!？」

思わぬ所から声が聞こえ、驚いた進の奇声が上がリ、その後歩の笑い声が続いた。

\*\*\*

『かかかか駆！なかに入ったら連絡しないんじゃないのか』

よ！」

確かに侵入した後は傍受のことを考え、通信をしない手筈になっている。しかし非常事態となれば話は別である。

つまり今が、その非常事態であると言えるわけで。

「いや、あんまりしゃべりすぎると、見つかる可能性が出てくるでしょ。」

「大丈夫、大丈夫。このフロアにはドローンしか他にいないんだろ？」

「でも声を聞き付けて誰か来るかもしれない」

『『問題なし』』

心配性の弟の言葉を、ややビビリな兄と、先程まで笑い転がっていた姉の一言が遮った。

『『お前がいるだろ（じゃん）』』

語尾は多少違えど、そこは兄妹。異口同音に弟への信頼を表した。

「っ！」

その言葉に駆は何も言えずただ、

「うん、そうだね。」

そう返すのが精一杯だった。

「じゃ、通信、切るよ。」

『あいよ、またな。』

『ん、また後だね。』

通信を切っても、しばらくそのままだった。

（またね、か…）

二人はこの作戦が無事に終わることを信じて疑っていない。他ならぬ弟であり、信頼する駆がバックアップについているからか。

ならば自分はその二人の信頼に応えねばならない。

「うん、頑張ろう。」

そう一言呟き、端末のキーボードに両手を滑らせる。

立体映像モニターには二人を示すアイコンがゴールに辿り着いていた。

\*\*\*

「ここか。」

「ここだね。」

### 《第七研究室》

目的の場所に辿り着き二人はようやく軽く息を吐く。別段、疲れ  
ているわけではない。

「進。」

歩の呼び掛けに進は、

「ああ。」

とだけ言い、右のポーチから二枚の偽造カードを取り出し、その一  
枚を歩に放る。

投げ渡されたカードを受け取った歩は扉の左側へ向かい、進はそ  
の反対の右側に向かう。

この扉は両脇に配置されているリーダーと呼ばれる機器に二枚の  
専用のカードを同時に読み込ませないと開かないどころか、失敗す  
ると24時間は絶対に開かない仕組みになっている

失敗れば、後はない。

進が歩に視線を向け、歩もそれに応えるように頷くのみ。

「1、2の、3……！」

ピピッと機器が反応し、……プシュー



と音を立てて扉が開く。

見事同時にカードを通すことに成功し、

「…………ふう。」

やはり同時に安堵の息が漏れ、それに気付き苦笑。

「ミスんなくて良かったね、進。」

「ああ。ミスったら駆の奴に何言われるかわかんねえからな。」

進と歩は軽口を叩き合いながら、暗闇に包まれた目的地へと足を運んだ。

004

1-04

SR

a

Sullen, but

Reliable

来週の更新はお休みとさせて頂いていただきます。そもそも今日の更新すら危うかったですよ。何考えていたんだ、先週の自分……。たぶん一月八日ぐらいの更新になると思います。見捨てられそうな気がひしひしとしますが気にしない。ご意見・御感想いつでもお待ちしております。気軽にどうぞ。コメント無しでも構いませんよ。

005

1-05

SR

Shot&amp; slash'Run

あけましておめでとございます！おそいよ！と、ツッコミが聞こえてきそうですが気にしない。まだまだ走りだしたばかりの『Joyful Joker』と進・駆・歩たちですが、今年もよろしくお願い致します。

ズダダダッ!!

「なーんてこうなるかなあ……。」

降り注ぐ銃弾を壁に隠れてやり過ごしながら、進はぼつりと呟いた。

一方、

「うーん、ねえ進。あの銃、軍のお下がりでね。それにあの防護服は『H2』のかな？」

進とは反対側の壁から少しだけ顔を出し、相手の装備を確認している歩。

今述べた『H2』とはある企業のことだが今は関係ないので後述するとして。

相手 サブ・マシンガン及び防護服装備の警備員 数およそ四名  
(さらに増える可能性大)

それに対して

こちら 高周波振動ナイフ一振りに拳銃一丁(麻酔銃は使い捨て)  
防具と呼べるもの無し 数二人

中々に最悪、それが進の判断である。

銃弾の雨は未だ止む事無く降り、それを尻目に進はポケットにしまい込んだ二枚のディスクに触れ、なぜこうなってしまったのか振り返ってみた。

\*\*\*

研究室に首尾よく忍び込んだ二人は、さっさとそれぞれの役割を

開始した。進は研究用端末に駆お手製のプログラムを仕込んだディスクを差し込み中身の吸い出し、歩は予備のデータベースに細工。端末にあつた防壁を一秒弱で突破し、目標のデータの吸い出しを開始。何のデータか気にはなるが知らないほうが身のためだろう。

吸い出しが終われば次は端末内のデータの破壊を開始するのだが、それが終わるまで進は暇であつた。

ふと、机の上にあるディスクが目についた。随分古い型であるそれを何気なく手に取り、

（…これぐらいいいよな）  
何気なく懷に収めた。

先程、歩に言った言葉は忘れることにして。

そして、データの吸い出し及び破壊が完了し、

「よし、おしまい。」

と進が上げた声と、

「おわつたよん。」

と、歩が作業の終了を告げる声と、

「二人とも、気を付けて！」

と、駆が警告を知らせるのは申し合わせたかのように同じで、そのきっかり2秒後に非常用アラームが鳴り響いた。

\*\*\*

それからはゴーグルに示された逃走経路を走り回り、なんとか逃げ回っていたが、ここに来て遂にゴーグルに表示された警備員用のアイコンが進行方向に現われた。

向こうもこちらに気付き、警告無しに銃弾を浴びせた。間一髪のところをそれを別々の壁に隠れて避け、現在に至る。

（さて、どうしたものか。）

昨今、企業に対するテロ行為が相次いでおり、それに対し企業も自衛手段として企業敷地内に関してのみ、このような武装が許され

ている。

「ねえ、歩。」

「ん、なに？」

流石に相手の観察に飽きたのか、返事は思いの外早く返ってきた。

「ジャンケン。」

その一言で全て理解したのか、歩は若干嫌な顔をした。

「ジャンケン…」

「「ポイツ！」」

進 グー

歩 チヨキ

「あう。」

呻き声を上げ、がつくりとうなだれる歩。対して

「よし。」

気合いを入れて、後ろ腰に挿してあるナイフを抜き放つ進。

「じゃ、いくよ。」

相手の返事を待たずして歩は壁から身を出し素早く腹這いになり、手にした拳銃の引き金を、五回引く。

思わぬ反撃に警備員が怯む。だが『H2』特製の防護服にこの程度の銃弾など豆鉄砲に等しく、怯んだところでわずかな隙にしかない。

（右脚及び左脚 筋力増強）

だが、その隙に、進は動いていた。

身体を屈め、一足飛びで警備員四人の真ん中に移動する。

知覚強化用義眼があっても捕捉できたかどうかからぬ速度。まして裸眼ならば、ほとんど瞬間移動と大差あるまい。

ビルとビルの合間を飛び、跳び、翔び上がり、ここの屋上まで辿

り着いた脚力を持つてすればこの程度のことは造作もない。

何の反応もできずに惚けている警備員に、進のナイフが踊る。

「ぐあッ!？」

一人目の腕が斬りつけられ、銃が落ちる…。

それより早く、さらに三度ナイフは踊り、残り三人の腕を斬り付けた。

「ギヤアッ!？」

と、悲鳴を上げる暇もあればこそ。

今度はナイフの刃を返し、峰で警備員の首筋を強打。十分な速度と硬さを伴ったそれは意識を奪うには十分で、一人、また一人と昏倒させていく。

が

「この、クソガキがああッ!！」

最後の一人が無事な方の手で拳銃を抜き、発砲。

パンッ

しかし、その拳銃から銃弾が放たれることはなく、それどころか、手から拳銃が弾かれるようにどこかへ飛んでいってしまった。

「悪いね。」

警備員は自分の拳銃が後ろに控えていた少女に撃ち落とされた事実など知る由もなく、意識を失った。

「大丈夫?」

弾が切れた拳銃を捨てながら、歩がのんびりとやってきた。

「ああ、フォロー、サンキュな。」

進はそう言いつつ、足元に転がっているサブ・マシンガンの内、適当に一丁選びそれを渡そうとして、それに気付いた。

「何で『紅風・改』持ってきてんだよ、お前エエッ!？」

歩の両手に彼女愛用の拳銃二丁が収まっているのを見て、進は思わず叫んだ。

『紅風・改』とは、『EXGM社』製の、一世代前の拳銃『紅風』

を歩なりにカスタマイズしたもので、歩にとってある意味兄弟たち並に頼れる相棒である。

「昔の人は言いました。『備えあればうれしな』。」

「言つてねエよ、そんなこと！つーか、どこに隠してたんだよ！？」

「ん？スカート穿いたオンナノコが銃隠すといったらここしかないでしょ？」

そういつて歩がチェックのスカートの両端を摘み上げる仕草を見て、

「な、お前、ちよつ」

進は相手が妹であり、尚且つその下にはスパッツがあることを知っていたながら顔が赤面するのを止められなかった。

歩はそれを見てケラケラと笑い、今までのやりとりを見ていた駆は

『Hurry! Hurry!』

とゴーグルを通して二人に逃走経路とともに表示するのであった。

駆がこの時、ため息を吐いたのは言うまでもない。



005

1-05

SR

Shot&amp;slash;Run

銃一丁、×銃一兆……。我がケータイよ、誤植としてはひどすぎやしないか？と、いうわけで誤字・脱字がございましたら、ご連絡ください。できればそれと一緒に感想とかも送ってくれたら幸いです。では、ロドリゲスでした。

006

1-06

SR

Shot&amp; slash, Run

前回、次回更新について何も言っていなかったことを激しく後悔。それはさておき。今回は歩について色々書いてます。説明文っぽいかもしれません。

首筋から脊椎にそって埋め込まれている鋼化神経ハードワイヤードを起動、反射速度を上昇させる。

と同時に両手両足の義肢を通常モードから戦闘モードへ移行。

歩は自分の身体が戦闘用に換わっていくのを感じ、我知らず口元に笑みが浮かぶ。

幼少の頃、兄弟をバラバラに引き裂いた事故により、歩は身体の半分以上の義体化を余儀なくされた。

さらにD地区で生き残るため通常の義体ではなく、戦闘用の義体化にまで手を出し、拳げ句、健康な箇所さえ切り取っていた。

両目・両耳がまさにそれで、耳は数百メートル離れた音や、可聴域を超えた音を聞き分け、目は紫外線、赤外線その他各種熱線を知覚し、さらにスマートリンク対応している。

スマートリンクとは、同じくスマートガン・システム対応の銃器とこの義眼がネットワークを通じて繋がっていて、銃口を向けた場所が照準として視界の中に表示される技術のことである。

そしてそのスマートガン・システム対応の拳銃『紅風・改』を両手に握る。

戦闘準備は整った。

今述べた歩の義体の内容は、ここ日本ではほとんどが違法で二桁以上の刑が確定することを忘れずに明記しておく。

二人して非常灯が点滅する廊下を走る。先程のように静かに走る必要はない。多少喧しくても今はスピードが肝心だ。

故に二人は尋常ならざるスピードで走る。

ちなみに、歩より進のほうが若干速い。

単純に直線ならば歩のほうが速いが、建物内のように入り組んだ場所は進に分がある。

右に曲がり、左に曲がり、非常用階段を駆け降り、直線走り抜ける所で、駆に通信を入れる。

「ねえ駆、そっちの状況は？」

歩の問い掛けに対する駆の返答は、

『あまり良くない。』  
だった。

『向こうの通信システムは完全に取り返された。一応ドローン制御用サーバーに仕掛けしておいたから時間は稼げらと思う。』

駆は駆で、警備システムの奪い合いをネットワーク上でやっているようだ。

警備員側のほうが人手や設備に分がある。さしもの駆も苦戦は免れない。

「仕掛け？」

進はどうやらその言葉に一抹の不安を感じたらしく、露骨に嫌な顔をした。

と、眼前に先程まで職務放棄した警備用ドローンの集団が姿を見せ、

『うん。標的を無差別に設定したから。』

内蔵してある機関銃を構え、

《サアアアチ・アンド・デストロオオオオイッツツ！！》

合成音にしてはやけに抑揚のある声を上げながら一斉に掃射を浴びてきた。

否、正確には浴びせようとした。

「遅い。」

機関銃による掃射が始まる直前、確かに歩はそう言った。

ドローンの銃撃より、鋼化神経で加速された歩の『紅風・改』の射撃の方が速い。

進は素早く下がって歩の射線を確認。

視界の中で踊る二つの照準がドローンと重なった瞬間、歩は引き金を引く。

ダダダダッ……！！

フルオート射撃と見間違える程の連射はドローンをスクラップにするのに十分な威力であった。

だが全てのドローンを破壊するには至らず、無事だった二体が今度こそ銃撃を浴びせた。

「くっ……！」

咄嗟の判断で、歩は身を屈めつつ両手をクロスさせ頭部と胴体をガード。

進はドローンの照準が歩に向いていると判断、その照準が自分に向く前に、壁面に跳躍しそのまま疾走、高速で過ぎていく銃弾を感じつつ、ドローンと肉薄する。

「あらよっと！」

掛け声とともにナイフの柄にあるスイッチを押して高周波を発生させ、ドローンたちを斬り払う。

まるで紙を斬っているかのような気軽さで、ドローンたちを、やはりスクラップにした。

足元に転がる残骸を小突きながら進はナイフのスイッチを切って後ろ腰にある鞘に収める。

「うっ、痛い……。」

そう呻きながら歩は進に駆け寄った。

「この服、結構気に入ってたのになあ。」

見れば歩の服は先程の銃撃でかなりボロボロになっていた。防弾効果が無いので当然といえば当然である。

しかし歩が受けた被害は概ねそんな所である。

身体は皮膚装甲で守られ、完全に無傷であった。

「乙女の柔肌になんてことしてくれるのよ、このガラクタ。」

（22世紀の乙女の柔肌は銃弾を弾くのか。）

ドローンの残骸を蹴り飛ばす歩を見て、ふと進の脳裏にそんな言葉がよぎった。

きっと駆も同じ思いだろう。

「いま失礼なこと考えなかった、進？あと駆も。」

「さて先を急ごうか。駆この先にあるエレベーターに乗り込めばいいんだよな。」

『うん乗り込んで5階に降りたらオッケーだよ。それじゃあ迎える準備をしておくね。』

早口にそうまくし立てると進は、足早にエレベーターに向かって走っていった。その速さは今までの比ではない。

「あ！コラ待て。」

それに歩が続く。やはりその速さは尋常ではない。

駆は矛先が自分から逸れてホッと一息を

「駆、あとで色々と話があるから。」

吐けなかった。

その後、進は逃げ込んだエレベーター内で歩と二人きりになってしまい、延々と文句を言われ続け、新しい服を買う約束を押し付けられるのであった。

006

1-06

SR

Shot&amp;slash;Run

蹴り飛ばす、×蹴りとバス。相変わらず絶好調です、我がケータイ。今回戦闘シーンは軽めにしました。『SR』は戦闘より、主要キャラの顔見せがメインなので。いずれ戦闘シーンは他のところで、がつつり戦るつもりです。ご意見・御感想お待ちしております。では、ロドリゲスでした。次回更新は一月二十二日（火）を予定します。

007 1-07 SR Sunrise again・(前書き)

『SR』編やっところ完結！本来はもっと短くする予定だったんです  
けどね（苦笑）



ポーン。

5階 エレベーターホール。

間抜けな音を上げ、エレベーターの扉が開いた。

そこから周囲を警戒しながら一人の少年が顔を出した。 進で  
ある。

その後を少女が続く。 歩である。

「異常無し、だな。」

「そうみたいだねー。」

進の言葉に歩も同意する。

事実、静かであった。 否、二人の発達した聴覚がこことは別

の場所で銃撃戦が行われている音を聞き取っていた。

おそらく、標的を無差別に設定されたドローンが警備員と戦闘を  
行っているのだろう。

どうやら見事に時間を稼げているようだ。

「よし、急ぐか。」

「ん、そだね。」

進の言葉に、やはり歩も同意した。

エレベーターホールを抜け、廊下をひた走る。

やがて二人はその突き当たりにある、窓を発見。 それに向かって

歩は疾走しつつ、『紅風・改』の残弾：合計9発全て撃ち放った。  
防弾の強化ガラスとはいえ、一点集中で撃ち込まれてはどうしようもない。ガラスは甲高い音を立てて砕け散る　かに思えた。

「あ、あり？」

ガラスには罅が入り今にも割れそうだが、割れてはいない。

「げー。」

「任せろ。」

最終的には銃を投げ付けようか考えていた歩を進が遮る。

進はナイフを抜き柄のスイッチを押すと、窓に向かって投げ付けた。

それは歩が撃ち込んだ場所と寸分変わらずに刺さり、次の瞬間には

ガシャン！

と音を立てて、今度こそ砕け散った。

そして二人はその開いた、五階の窓から飛び降りた。

人通りの少ない、深夜のオフィス街。薄暗い道に二つの人影が舞い降りた。

進は着地の瞬間、転がって衝撃を上手く吸収する。多少の痛みがあるが、まあ問題はないだろう。

一方、歩は両脚だけでなく両手も使って着地。義肢を駆動させ、衝撃を緩和する。

「……………」

進は、歩の足元にできてしまったクレーターを見て、なにやら複雑な顔をした。

歩の名誉のために言うておくが、これは仕方のないことである。身体の大半を義体にしていて標準より重い彼女が、五階の高さから飛び降りたのだ。当然と言えば当然である。

「お、あつたあつた。」

着地の際落とした自分の銃と、ついでに進のナイフを見つけた歩が嬉しそうに近寄ってきた。

進の不躰な視線には気付かなかったようだ。

歩が進にナイフを渡したところで、目の前の通りに一台のバンが急停止した。

そして後部座席のドアが自動で開いたのを見て、二人は急いで中に入り込む。

「お客さん、駆け込み乗車はお止め下さい。」

運転席に座っている少年が冗談めかしてそう言った。

優しそうなぱっちりとした黒い瞳に同じ色の髪を中途半端な長さにしている。

二人の弟、駆である。

「えー、良いじゃん、駆ウ。」

「ケチ言つな、駆。」

自分たちの弟に冗談っぽい文句を言いつつ、二人はゴーグルを外す。

久々の外気にさらされた目元は、兄弟、それも三つ子と言うだけあって、なるほどよく似ている。

「えーと、首尾は？」

車を走らせつつ、駆は兄姉に問い掛けた。

「駆の遅効性ウィルスは、バックアップデータにちゃんと流していたよ。」

「ん、これでデータの復元は不可能と。」

歩は駆の言葉を聞きつつ、座席に体重を預けた。

一方、進は

「まあまあ。」

と、言いつつ懷にしまっていたデータディスクを渡す。二枚とも。

「よし、後はこれを依頼者<sup>クライアント</sup>に渡すだけで、ちょっと待って！？」

「あ、やべ。」

「ねえ、何で二枚あるの！？なに余計な物まで持ってきてるの！？」

「いやー、ちょっと小遣い稼ぎをしようかと」

「あー！私には万引きするとか言ってたくせにー！」

「まあ、待て」

「警報が鳴ったのは、もしかして……」

「それは絶対関係ない。」

「いやいや、ひょっとしたら……」

「駆、適当なことを言うな！？あと歩！空っぽの拳銃を持って何する気だ！？」

「そう……。今日私の服がボロボロになったのも、エアダクトを延々上り続けたのも、私の身体（主に胸元）が成長しないのも……」

「待て、歩！？後ろ二つは明らかに関係無いぞ！？それにお前の胸がペタンコなのは」

「キル・オア・ダアアイツ！！」

「ぎゃああああっ！？生存ルート無ッシングウウウ！？」

後部座席ではしゃぐ（暴れる）兄妹を尻目に駆は車を一路、依頼者に指定された場所に向けた。

「……………」

警報が鳴ったのは、実は自分がよそ見した際、眠らせた警備員を他の警備員によって発見されたから、ということは生涯の秘密にしようとおこうと心に誓う駆であった。

見れば、朝日がゆつくりと昇り始めていた。

\*\*\*

「はあゝい、みんなグツモ〜ニング。

ウィリアム・斉藤のウェブ・ラジオの時間ヨ。

六月四日もイイ一日になるかしら？

そーそー、聞いた？なーんかC地区で銃声がしたんだって。

テロかしら、恐いわねえ。

ワタシみたいな弱いオ・ト・メは夜中出歩いちゃダメよ？それじゃ早速最初のお手紙<sup>メール</sup>紹介するわね。

ラジオネーム『Joyful Joker』さん。もう常連サンね。えーと、『今日初めてデカイ仕事を任されました。失敗しないか緊張でドキドキしてます。なので自分に勇気が湧くように『FF』のセカンドシングルの『Sun Rise again』をリクエストします。』だって。わかるわ、その気持ち…。

ヨッシャア、任せろオ！！勇気だけじゃなくて元気とかも一緒に湧きなさい！それじゃあ『FF』で『

『Sun Rise again』



次のお話は、22世紀の日常というか、事件と事件の間みたいなを書きます。ご意見・御感想お待ちしております。 次回は来週の火曜日あたりを目指します。

新キャラ登場です！：しかし、短いです。それと22世紀の日常とやらを書きそびれました！（汗）



「へへへ、こりや上玉だ。」

男たちはツイていた。ここしばらく獲物と呼べる相手もおらず、飢えていた。

しかし、今日の獲物は最高だ。

一人は少女で、亜麻色の髪を肩にかかる程度の長さに揃え、整った顔立ちをしている。

青色のレースをあしらった白のシルクのワンピースを着こなすその身なりと自然と溢れる気品から、どこぞの企業の令嬢の可能性が高い。

もう一人は黒の上等なスーツを身に纏い、その身のこなしからおそらく少女の護衛だろう。手に傘を提げているのは解せないが。

傍らに立つ少女より長い黒髪をうなじ辺りで無造作に縛り、その顔はどこか中性的な印象を与える。少年と呼ぶには大人びていて、青年と呼ぶには少し幼い。

この二人が並ぶ姿はなかなか絵になった。ただし場所がパーティ会場ならばの話だが。

ここD地区でその格好は笑ってしまうほど浮いている。

二人とも身ぐるみ剥いでどこぞのマフィアか人体売買業者にでも売り付ければいい金になる。無論その前に散々楽しむが。少女はもちろんのこと、少年の方も悪くない。

男たちは自らの皮算用に狂喜した。

「まあ、久しぶりの“カツアゲ”ですね、<sup>マモル</sup>護人？」

少女はツイていた。久しぶりに来た、ここD地区で早速“カツアゲ”されているのだ。それに最近、となりにいる護衛である護人の

頑張りのせいで、こうやって話し掛けられることもめっきり減った。

「喜んでいる場合ではありません、望美<sup>ノゾム</sup>お嬢様。」

少年、護人はツイていなかった。自らの主人たる少女のお忍びに付き添ってここへ来るようになって2カ月になる。最初はこうやって話し掛けられることも多かったが、そのたびに退け、いつしかちよっかいをかけられることが無くなった。

主人としては大変つまらなさそうだったが、護衛としては万々歳だ。

今日も今日とて安全無事に“彼ら”のもとに行く予定だったのだが…。

「やれやれ……。」

少年は頭を振りつつ自らの主人の前に出、持っていた傘の柄を握んだ。

「おいおい、そんなモンでどーするつもりなんだい？」

男たちは嘲り笑いながら各々の手に持つ拳銃を構えた。

「こつちには銃があるんだぜ？」

護人はこの不埒者たちを心底哀れんだ。ただか銃を持ったぐらいで勝利を確信したことを。護人という死神に会ってしまったことを。

そして何より、彼、と言うよりその背後にいる少女　望美に銃を向けてしまったことを。

「護人。懲らしめてあげなさい。」  
「仰せのままに。」

望美の言葉に、護人が持つ傘　に仕込んだ刀が答えた。  
抜き放たれた刀は一閃のもとに眼前の男の腕を斬り落とした。

「へ……？」

あまりにも鮮やかな斬れ味に男は最初、何をされたかわからなかった。

だが、次の瞬間

「ぎゃああああ！？」

斬られた自分の右腕を押さえ、どうしようもない悲鳴を上げた。

「喚くな。医者に見せればまだくつつくぞ。或いはこれを機に義肢に取り替えてはどうだ？」

加害者である少年はとくに悪びれた様子もなく、そう言い放った。  
手にした細身の直刀には血が一滴も付いておらず、また斬れ味が  
落ちている風でもない。

仕込み刀にこんな斬れ味と強度があるものかと、刀を知る者は思  
うやも知れぬが、それは一世紀以上も前の話だ。

「テ単合金」なる物を用いて作られた、近代名工の技術の結晶たる  
この『ミカド・グループ』製

「レイザー・エッジ」ならばこの程度のことは造作もない。

「さて、少し痛い目を見てもらおう。」

刀を手に提げ、歩み近づく漆黒の護衛を見て、男たちはようやく気付いた。

自分たちはツイていなかったことに。

次回更新は、やっぱり来週の火曜日を予定してます。次回こそ22世紀の日常を書きます！

今更ですが、この作品はフィクションで実在する人物、企業、宗教などとは一切関係ありません。…こんなんでいいんですかね？

タテのヒント・6

2112年9月3日マツシバにて発売された猫型ドローンの名前

そのヒントを見て、目の前に浮かぶ複数の空白の内、五個にその名前を入力していく駆。

今、駆がしているのは、いわゆるクロスワードパズルなわけだが、立体映像で表示されているこれは縦横に加えて奥まである。

最近流行りの立体クロスワードパズルである。

(猫型ロボットねえ)

駆は先程の答えについて思案した。

一世紀前の人たちは未来にこういう希望を持っていたのだろうか。例えば気軽に空を飛んだり、例えば遠くの場合に一瞬で行けたり。

だが生憎と、このアニメの技術はほとんど実現していない。タケ

コなんて然り、どこでもなんて然り。

唯一実現しているのはこの猫型ロボットそのものだけではない。うか。

マツシバという会社からそのロボットの誕生日に発売された同型のドローンは老若男女問わず結構売れたらしい。

最も、駆はその時それどころではなかった。

身体を動かすのもやっとだったあの頃は

「おっと、次次」

長く物思いにのめり込んでいたようだ。かなりの時間がすぎている。

ここ、D地区のとある一画、アパート『桃中家荘』の二階の一室。

現在の住居であるそこで駆はくつろいでいる。

「ん？」

室外用のセンサーが音もなく反応したのに気付き、音声でカメラを操作。

外出している同居人にして兄姉の帰宅かと思ったがそうではなかった。

右端に『2115/6/5/11:23』と表示されている映像には、少女とそれに付き添う少年の姿が見て取れる。

「望美と、……護人くん？」

少女の名前は普通に口に出たのに、少年の名前の時は言い淀んだように感じられたのは気のせいかな？

「また、来たんだ」

その言葉に悪意や敵意は無いことを一応表記しておく。なぜなら駆の顔がわずかにほころんだからだ

「御免下さい」

鈴の音を転がしたような澄んだ望美の声が駆の耳を震わせる。

初めて聞いたときは聞き惚れたその声も最近になってようやく聞き慣れたものだ。

「はい。少し待って」

と言いつつ、クロスワードパズルを中断して扉を開ける。

「こんにちは」



「こんにちは。お邪魔してもよろしいでしょうか？」  
「うん、いいよ」

駆の言葉に頷き、部屋へと入る望美。その後、護人がつづく。

「ま、護人くんもよく来たね」  
「お嬢様の付き添いだ」

護人のやや高いハスキーボイスが駆の言葉に答える。  
わずかに目が合ったかと思っただけ、顔を伏せた駆を見て、護人は一瞬ため息を吐く。

（嫌われたものだ…）  
好感を持たれている印象を護人は受けることが出来ない。  
近づけば離れ、話し掛ければ目に見えて動揺する。先程のように目が合えばすぐに視線をそらすなど、とてもではないが好かれていないとは思えない護人であった。

一方、駆は護人と目を合わせられない。

（綺麗だな…）  
望美もなかなかの美人ではあるが、護人の方が綺麗だと、駆はそう思う。

この評価は二人に対して極めて失礼なことであることは自覚はしている。だがこの美丈夫の顔を見続ければ頬は紅潮し、心臓が高鳴り、物事をまともに考えられなくなるのが現状だ。

男性に対してこんな感情を持つ自分に嫌気を感じる駆であった。

「駆くん。進と、あとついでに歩は？」  
（歩、ついでなんだ…）

望美の言葉に苦笑する駆。

「二人なら一緒に出かけてて、そろそろ戻って」

「ふ、二人一緒ですって！？なぜ止めなかったのです！？」

（なぜ止める必要があるんだろう）

望美の発言に頭を真剣に抱えなくなった。そもそも進と歩は兄妹である。望美が思うようなことにはまずなるまい。

「お嬢様、落ち着いて下さい」

「私は落ち着いています！」

護人の諫める言葉もあり効果が無いようだ。

「「ただいまー」」

タイミングを見計らったかのように進と歩が帰ってきた。そのタイミングが良いか悪いか別として。

「お、おかえり」

帰宅した兄妹を駆が迎える。頬がわずかに引きつっている気がするが。

「はい、おみやげのドーナッツ　あれ？望美と護人じゃん。久しぶり」

「お、お久しぶりです。どこに行ってたんですか？」

「ん？どこでもいいじゃん」

「よくありません！」

「何怒ってんの？」

「怒ってなんかいません！」

「ねえー、望美うー。何しに来たのー？」

「歩、あなたには関係なくて、なぜ進と腕を組んでるんですか！  
離れなさい！私だって組みたいのに！」

「く、組みたいのか…」

「えー、イイじゃん。兄妹なんだから。ねえー、『お兄ちゃん』」

「お前、気色悪いこというな」

事実、進と駆は鳥肌が立っていた。

いつまでも続くかと思える、この不毛な言い争いを止めたのは望美の従者たる護人の

コホン

咳払い一つだった。

絶妙なタイミングでなされたソレに三人は会話を止めて護人に視線を向ける。

「進、歩。お邪魔しております。お茶を入れさせていただきたいのですがよろしいですか？」

恭しく頭を下げ、にこやかな笑みを浮かべる護人に、頷く三人。

望美は自らの失態を恥じて照れ隠しに咳を一つ、歩は組んでいた腕を離す。

進は解放された腕をほぐしながら、望美は何を怒っていたのか思案するも2秒で断念。

それにさつき腕を組みたいとかナント力言っていたが、聞き間違いか、或いは歩に対する対抗心からか…。こちらは3秒程熟考するもやはり断念。

「あ、護人くん！僕がやるよ」

キツチンに向かった護人を追って駆もその後続いた。



勝手に好評? 誤変換シリーズ! … ではあるが、xでは有賀… ということな、x呼というな それはさて置き、なにやらBL臭が漂って来ますが、いったいどうなることやら…。

いまさらですが、よくサブタイトルが予告無く変更する事があります。御了承下さい。あと10話やっそこ突破しました。

この時代における紅茶は、一般的に味と香りを再現するように合成されたものを指す。

天然物というだけで高い値が付くこのご時世、紅茶等といった嗜好品にまで贅をこらす余裕はない。少なくとも庶民たちには。

「……………」

その庶民とは遠く離れた存在である護人はお湯を沸かしつつ、合成紅茶の素を手にして思案に暮れていた。

（分量が解らない…）

どうしたものか。

天然物ならば完璧にこなせる護人もこのような合成紅茶は、とんと門外漢である。皮肉なことに。

（恥を忍んで聞くべきか？聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥と言うし。いや待て聞くとときも恥をかくではないか。従者の恥は主人の恥。まして進たちの前でそれは避けるべきだろう。ならば適当に入るか？いやそれで上手くいけば良いが失敗すればそれは取り返しの付かない事態になりかねない。いや、なる。ならばお嬢様の従者としてやるべきことは唯一つ…）

「この護人、一世一代の大仕事…！」

「手伝おうか？」

先程から微動だにせず、ブツブツとなにやら呟いている護人を見

て、駆が口を挟んだ。

「む？なんだ？」

自分としては普通のつもりだが、駆からしてみれば睨んで見えたようだ。

わずかに身体を震わせ、恐る恐る再び声を出す。

「だ、だから、手伝おうか、て言っただけど……」

再び思案する。今度はさほど時間をかけずに、

「すまない。頼む」

と言った。

言われた駆は、どこか嬉しそうに

「うん！」

と言った。

合成紅茶の素を適当に計りつつポットの中へ入れていく。

駆曰く、合成紅茶はこのままだと舌触りが悪く美味しくない。のでカップに注ぐ際、上澄みだけを上手に入れるのがポイント、だとか。

そんな説明を聞きながら、所在無さげに駆を見る護人。

何か手伝えることは無いかと視線をめぐらせると戸棚のカップが目に入ってきた。

（これぐらいなら……）

と思い、手を伸ばす。

ちょうど同じタイミングで駆もまた、手を伸ばした。



「え……」

「あ……」

自然と二つの手は、駆の手を護人の手が握りこむように重なり合った。

護人は思う。

このか細く柔らかな手、白魚のような指をずっと触っていたいと。

駆は思う。

力強く、しかし同じ男とは思えぬ優しげな繊手を、どうか離さないでと。

「……………」

そして二人は自然と見つめ合う。

二人が我にかえる時間はさほどかからなかった。…もっとも十秒を短いとするかは意見の分かれるところではあるが。

\*\*\*

「なにやらキッチンから入りにくい空気が漂っていますね……」

望美の言葉に進と歩の二人は無言で頷く。

「少しは進展したかな？」

「あら、歩は応援するのですか？」

「そだけど、何で？」

「普通、姉というのは弟の恋人に嫉妬するものではなくて？」

「そ、そなの？進？」

「さあ、俺に振られても……」

「まあ、私的には進に彼女ができたなら妬くかも」

「え…………ッ!？」

「冗談だろ？」

「ジョーダンだよ」

歩の言葉に望美は盛大に驚いていた。もっとも言葉のとおり冗談ではあったが。

「まあ、実際問題として駆が誰と付き合っても俺としては別に関係ない」

「私も以下同文」

「それに相手が護人ならなおのこと」

「以下同文」

弟を生暖かい目で見守る兄妹を見て望美は、くすりと笑みをこぼす。

「しかし驚きましたわ。護人の『正体』を知っているなんて」

「見れば解るよ」

「え？マジで？最初見たときは解らんかったが…」

「ダメだなあ、進は」

「じゃあ、お前は一発で解ったのか？」

「うん」

歩の言葉にうなだれる進。それを見ていた望美はどこか声を潜ませて言った。

「解っているとは思いますがこのことはくれぐれも内密に…」

「解ってる」

三人は知っている。

「護人の『秘密』は隠し通す」

護人が、『女性』であることを…。

だが、知らない。

「駆も知っているだろうから、一応言っとくか」

駆がその『事実』を知らないことを……。

はい、というわけで護人は女の子でした。BL的な展開を期待した方、ご期待に添えず申し訳無い。しかし、ラブコメはむずいなあ…。次話は早めに投稿します。

連続投稿！頑張っています！ちなみに長いです。

護人が紅茶の載った盆を持ってきた。その足取りは洗練されていて隙が無い。その後には駆が、おずおずと続く。

駆は顔を伏せてはあるものの耳まで赤くなっており、対して護人の表情は無、全くの無であった。

しかしそれが沸き上がる感情を無理矢理押さえ込んでいるからだ、ということ付き合いの長い望美は見抜いていた。

「遅くなりました」

慇懃に礼をするその様子にも、先程の空気を感じることはできない。

流れるような動きで、かつ音もなく人数分の紅茶を配る。

本来ならばそのまま主人の後ろへと行くのが常なのだが、今回は違った。

手元に湯気を上げる紅茶が一つ残っている。無論、護人の分である。

主人と食卓を供にするなど持った他だが、ここにいる残り四人の総意によって同じくテーブルに付くこととなった。

進、歩、駆の順に並び、対面に望美、護人が席に着く。

「それではいただきますね」

望美のその言葉が合図となり、昼食前のささやかなティータイムが始まった。

望美がカップに口をつけ紅茶を一口。

「美味しい……」

「お褒めに頂き恐悦至極…、なんてね」

望美の言葉に冗談っぽく礼を言う駆。

「でも望美ぐらいのブルジョワならもつとイイ紅茶飲<sup>モン</sup>んでんじゃないの？」

「まあ、そうなんですけど、でもこっちのほう美味しいです」

「申し訳ございません、お嬢様。自分の腕が至らぬがばかりに…！」

「あ、そう言うわけじゃなくて…」

「まあまあ。それよりドーナッツ食べよ」

望美はそう言ってドーナッツの入った箱に手を伸ばす。

「あ、望美。先に二人から選ばせ」

「早いもの勝ちい！！」

たしなめる駆の言葉を歩の弱肉強食の掟が遮る。

「チョコゲーツ！」

「歩ウウツ！？お前それ俺のだって買ったときから言ってただろ  
うがアアアツ！？」

「あゝん？聞こえんなあゝ」

「チクシヨウ！？だがチョコはまだ」

「お嬢様、こちらでよろしいですか？」

「有難う、護人」

「護人ウウツ！？お前もかアアアツ！？て言つか取るの早ツ！  
！」

「お嬢様のためならばこの程度のこと、造作もない…！」

「クソ！無駄にハイスペックだなあ、オイ」

「進、進」

「なんだ、駆？」

「早く取らないと無くなるよ？」

「はッ！？もうノーマルのヤツしか無えッ！？」

「残念」

「ご愁傷さま」

「バカだなあ」

「やれやれ…」

「どいつもこいつも、いつの間にとってんだよ！？」

「進が遅すぎるんだよ」

「ていうか誰だよ！ノーマル二つも買おうて言ったヤツ！？」  
「進」

「なにやってんだ、一時間前の俺エエエッ！？」

後悔先に立たず。

「チクシヨウ！？俺二つ食うぞ？いいな！？」

もはや半泣き状態である。

「たかだかドーナツで泣かなくても…。あら美味しい」

「食べ物への恨みは怖いと言います。ええ、美味しゅうございますな」

「最近、このドーナツ…、えーと、M・ドーナツ？」

「ええ、M・ドーナツですわね」

「それぞれ。そのヤツ、結構美味いんだよね」

「いえ、それ程でも…」

「何で、望美が照れるの？」

「ところで何で6個しか買ってこなかったの？」

「望美たちが来ると知ってたらもっと買ってたよ！つーか貰うぞ！  
？いいな！？」

と言って6個目、つまり最後の一個に手を伸ばす進。

「させぬ…！」

ペチッ！！

「痛ッ！？」

「「ナイス護人！」」



それを阻止せんと護人がその手を叩き落とす。そしてそれを讃える歩と駆。

「くそう…、この世にや敵しいないのか…」

苦笑しつつも、真剣に進が哀れに思えてきた望美は

「あの、進？半分ですが、よろしかったらどうですか？」

「な、なに？くれるのか!？」

「はい。どうぞ」

上品にドーナッツをちぎって進に差し出す望美。

それを進は身を乗り出して、

「あむ」

事もあるうちに、彼女の指先ごと直接口にした。

「…………ツ!？」

「んまーい」

咄嗟のことに反応できない望美を尻目に、ドーナッツを味わう進。

「せい… ツー!」

間髪入れずに進に拳を見舞う護人。

それを見て、冷やかす歩と呆れる駆。

そしてそんな騒ぎとは別に、頬を紅潮させ、進にくわえられた指先を誰にも知られぬよう、そっと抱き締める望美であった。

\*\*\*

「もう帰るのか？」

時間だからと言って椅子より立ち上がった望美たちに進が声をかける。

ちなみに歩と駆は昼食の準備に取り掛かっている。

玄関まで見送りに行く進。護人はすでに外に出ている。主人にいらぬ気を使ったわけではないが。

「突然お邪魔して申し訳ございません」

「なに言ってたんだ。いつものこと」

「全くもって邪魔だ」

「歩お前は黙ってる！あー、ま、気にせずいつでも来てくれ」

「手ぶらはお断わり」

「歩お前はホントに黙ってる！？」

「ふふ、いつも仲の良い兄弟ですわね」

「うるさいだけだよ。まあ、歩はああ言ってるけど気にしないで」

「じゃあ、気にしません」

と、笑顔を浮かべる。

その笑顔は自然と浮かんだ、年相応の可愛らしいものであった。

もとより顔立ちが整っている望美がこんな笑顔をすれば、並みの男はまず落ちる。どころか、自らに好意を抱いているのでは、と勘違いさえするだろう。

「少しは気にしろ」

しかし進は違うのか、冗談っぽく言葉を返すに止まった。…もつともわずかに紅潮している頬に気付いたらそれがただの照れ隠しであることがわかるだろう。望美としては残念なことに、それに気付けなかったわけだが。

それでは、と踵を返す望美。

正直な話、引き止めてほしいという気持ちが本音だが、これ以上わがままは言えない。

「あー、望美」

「はい？」

振り返った望美の口に何かが触れた。

「ん……」

それは……、

「一個残しても取り合いになるし、やるよ」  
ドーナッツであった。

「……いただきます」

（何期待していたんでしょうか、私）

両手でドーナッツを持って嘆息する望美。  
それを見て首を傾げる進であった。

\*\*\*

「では、お嬢様。本日のご予定ですが……」

「……………」

護人の言葉を聞いているのかいないのか、望美は手に持ったドーナッツをじっと見ていた。

「お嬢様？」

「聞いています」

望美は明らかに不機嫌だった。これから向かう場所を思うと憂鬱な気分になるのも頷ける。

「失礼しました。これより来栖市役所にて市長と会談、その後は定例報告会及びM・ドーナツの新商品の打ち合せ。それから」  
「護人が電子手帳を片手に予定を並べていく。それを聞きつつ、進に渡されたドーナツを一口、口にする。」

「不味い…」

あの時はとても美味しく感じられたドーナツは、今では別の食べ物のように思える。それでも頑張って食べつくす。  
ふと、進にくわえられた指先が目につく。ほとんど無意識のうちにそれを口元に運ぼうとして、なんとか思い止まる。

「護人」

「はい」

自分の指先を眺めていた望美の言葉に、前を歩いていた護人が振り返る。

「皆とするお茶会は、とても楽しいものですね」

「はい？」

「いえ、何でもありません」

その顔に一瞬だけ憂いを浮かぶも、次の瞬間には笑みが浮かぶ。しかしその笑みは先程進に向けられた年相応のものではなく…、

「では護人、参りましょうか。年寄り共の相手に」

ミカド・コーポ  
超企業がー社『ミカド・グループ』の幹部にして企業人である『  
御門 望美』が浮かべる、伶俐で計算された笑みであった。

勝手に好評？誤変換シリーズ！ 浮かんだ、x有漢だ というわけで望美の正体？をバラしてみました。もちろん進は知りませんが。

今回は、明日はバレンタインデーなので、ソレにちなんだヤツをしようと思っっています。お楽しみに！

バレンタインデーということで、それにちなんでみました。作中時間で4カ月前の話です。…ちなみにチョコを渡す話ではありません。

2115年2月14日

世に言うバレンタインデーである。

（何をしているんでしょうか…）

そんな特別な一日もまもなく終わる22時43分に、望美はそんなことを考えていた。

肩までかかる亜麻色の髪を触り、その可愛い顔には、今は憂いの表情が浮かぶ。

ベッドに横たわるその姿は、童話の世界からこぼれ落ちた眠り姫のように美しい。

はあ…と、ため息を一つ。

（本当に何をしているんでしょうか、私）

自室のベッドに横たわりつつ、傍らに無造作に置かれた小箱に指を這わせる。

バレンタイン。それは世の女性たちにとって心踊るイベントのハズだ。

気になる異性にチョコレートを手渡し想いを伝える。結果、ハッピーエンドになったりならなかったり、付き合ったり合わなかったり、なんにせよ、思い出にはなるはずだ。

はあ…と、再びため息を吐く。

身体を起こして小箱を手取る。

少女はその箱の中身を無論知っている。



意味もなく取り寄せたチョコレートだ。それも明らかに意中の男性に渡すようなソレ、つまり本命用のチョコレートだ。

ハート型の箱にいかにも女性受けしそうな可愛いラッピング。中身は今時珍しい天然の力カオを用いた高級チョコレート。

もつとも、渡す相手がいなければ宝の持ち腐れだ。

はあ…と、もはや何度目かわからぬため息を吐く。

本来、望美ぐらいの年齢ならば学校に行き、勉学にスポーツに、そして恋にいそしんでいるはずだ。

しかし『御門』一族として、幼少の頃より英才教育を施された少女にそんなものとは無縁であった。

齢十五才で、今や企業の経営に口を出せるまでに成長した望美であるが、では年ごろの少女としての成長はどうかだろうか。

答えはきっぱりと『NO』である。

気の置けない友人などいない。彼氏もない。というより気になる異性がない。

いるのは『御門』の名前に媚へつらう醜い大人と、自分を妬む無能な輩だけ。

恋がしたい

望美はいつからかそう思うようになった。

燃えるような恋がしてみたい

私を『御門』とは関係なく好きになってくれる男性ヒトが現われて、恋に落ちる。相手はどんな男性かしら？どうせなら私と身分の差が

あるほうがいいわね。たとえば明日をも知れぬ貧乏人。あるいは他企業の私と同じ年齢の企業人。最初はお互いの事を知らなくて、一挙手一投足に一喜一憂して、少しずつわかりあって、たまにケンカして、でもすぐに仲直りして、それから

（私が『御門』だとばれて、おしまい）

白熱した想いが急速に冷めていくのを感じる。  
馬鹿馬鹿しい、と口から言葉がこぼれる。

結局、それは夢物語。  
叶うはずのない、夢。

でも、もしそれが叶ったら…

（やめましょうか）

手にした小箱を自分の机の電子錠付きの引き出しにしまう。  
そしてそのままベッドに倒れるように横になる。  
明日も早い。早く寝てしまふべきだ。

（せめて夢の中だけでも…）

そう思い、少女は瞼を下ろす…。

\*\*\*

少女はこれよりおよそ二カ月後に、自らの願いが叶うことになる。

つまり、ある少年と運命的に出会い、恋をする。  
その少年の名前は『進<sup>ススム</sup>』。

無論、望美がそのことをこの時点で知る由もない。

二人はいかにして出会うのか。それはまた別のお話。

どうでしたか？恋に憧れる少女、という雰囲気は出てましたか？あと、望美がすごいお金持ちというのを表現し損ねたことを後悔したと思う。

次回からは火曜日投稿に戻ります。

今回ははっちゃけました。∴それはそれとして最近スランプ気味です。

瞼をうつすらと開ける。

瞳がまばゆい光をとらえる。

ボーッとした頭を覚醒に促しつつ、歩は現状の把握に努める。

（ええ、と……私は）

まばゆい光の正体は照明灯のようだ。

次に自分の状態を確認する。

緑色の手術着を着せられている。

そして大の字になって寝かされている。

まだ、麻酔が抜け切れていないようだ、頭がくらくらしている。

「ひーひひひひ！施術は完璧じゃああああッ！ー！」

首をその奇声がしたほうへ向ける。正直見たくはないのだが、傍らに怪しげな老人が立っていた

怪しげな老人。その表現は決して過剰な表現ではない。

頭は淋しい状態で両脇に灰色じみた白髪が残るばかり…もつともその残った部分は重力に逆らうように逆立っていて自己主張に余念が無い。

ヒゲも髪と同じ色で同じようにやはり自己主張が激しい。

本来清潔であるべき白衣は、どれだけ洗われていないのか解らぬほど汚れている。

だがそんな特徴よりもまず痩せ細った顔にある、むき出しの義眼

が目につくだろう。

そして左腕は肘から先が無く、代わりに備わっている四本の小型マニピレーターが忙しく動き回っている。

「くくく、目が醒めたかねエい」

歩は一瞬で覚醒した。

（ああ、そうだ。義体の調子が悪かったから看てもらったんだっけ…。まあ、それはそれとして）

「ねえ『ドク』。やりたいことがあるんだけど」

「うむ、ワシもじゃ」

『ドク』と呼ばれた老人は、歩の言葉に頷いた。  
そして歩は、大きく息を吸い込む。

「やめろ！シヨツ」

「木梨ノリタ あ違う 歩は改造人間である」

「ぶっ飛ばすぞ、ってフライングした上に台詞トチるな」

「ああ、スマン」

歩の言葉に頭を下げる『ドク』。

「テイク2いくぞい」

「ん」

歩が再び息を吸い込む。

「やめ」

「何やってんのさ、二人とも」

「タイミング悪ッ!？」

呆れたように話し掛けたのは駆であった。

「くくく、見てわからぬか」

「うん。わからない」

「ひーひひひひ、お約束というヤツじゃあああ!」

「あ、そう」

「なーんじゃ。つまらん反応じゃのう」

「それより歩、調子はどう?」

「んー」

言って身体を起こし、義手である自分の両手を見る歩。

「少し反応が悪いけど、まあ、こんなモンかな」

ゆっくりとした動きで手術台から下りるも、足元がおぼつかない。バランスを崩して倒れそうになるが、駆が素早く駆け寄って支える。

（重ッ!?!）

そう思いはしたものの口にはしない。

「くくく、ワシの施術は完璧じゃ。万に一つ…いやさ!億に一つの失敗も無いわ!ー!ひーひひひひ…げぼげぼ!」

どうやらむせたようだ。

「んで駆。なんか用があったんじゃないの」

「ああ、そうだった。『ママ』が呼んでるよ」

「アレ?ワシってばガン無視?」

「「うん」」

あっさりとそう言い放つ二人。



だが、そんな扱いにショックを受ける老人ではない。

「ひーひひひひ！それはそれとして頼まれていた新兵器が完成したぞい！」

「ねえ『ドク』。僕が頼んだのは確か進のナイフの修繕だったと思うんだけど…」

「頼まれとらんに余計な機能まで付けといたぞい！」

「わかっててやったの！？」

「くくく、見るがイイ！そして恐れるがイイ！！ワシの才能を！！」  
「もう十分恐れているよ」

駆のぼやきなど一顧だにせず『ドク』は部屋の奥に無造作に積んであるがらくたの山を漁りだした。

「私着替えてくるから、あとよろしく」

「あ！ズルツ！？」

「んゝここかなゝそれとも…、コレじゃあ！！」

奇声を放ちつつ振り上げた右手に奇妙なモノがあった。

「ドリル………？」

ナイフの刀身はなぜかドリルになっていた。

「そうドリル！ドリル、それ即ち漢おとこのロマン！ドリル、それ即ち漢おとこの夢！！この光沢この形状！さすがワシ！！天才じゃあ！なに、みなまで言うな。拍手はいらん！……どうした少年？近くにあったスパナなんぞ手に持って？ああナルホド拾ってくれたのか。ん？どうした少年？なぜそれを振り上げる？ところで顔が笑つとるのに目が全然笑つとらんのじゃが」  
「アホかあああッ！？」

\*\*\*

「お待たせー、てアレ『ドク』は？」

緑色の手術着を脱いでいつもの格好 チェックのスカートに昨日進に買わせたシャツ、髪は結ばずそのままにしてある に戻った歩が、なぜか肩で大きく息をしている駆に声をかけた。

そんな駆は静かにがらくたの山を指差した。

その山からなぜか、にゅっと二本の足が生えていた。

ドリル〜と怨念じみた声がするの、どこか鉄錆びた匂い…つまり血の匂い…がするの、きつと気のせいだろう。

「じゃあ、行こっか？」

とりあえず、コレは見なかったことにしようとか心に決めた歩であった。

「ああ、うん。行こっ」

駆もとりあえず、老人については気にしないことにした。

勝手に好評？誤変換シリーズ！ 見てわからぬか、×みて羽から糠。  
つまらん反応じゃのう、×妻らん反応じゃ脳。 嘘みたいです  
が本当に一発変換で飛び出ました。しかし明日ケータイを買い替える  
ので、多分このシリーズは最終回だと思います。

014 2-06 ID Interval Days・三つ子の事情。

後書きにちょっとお知らせがあるので確認お願いします。

『桃中家荘』管理人室にて進、歩、駆の三人は集まって…否、正確には集められていた。

テーブルに先程の順番で座っているのだが、先に来ていた進はなぜか突つ伏したまま動かず、頭には冗談のようなたんこぶが出来ている。

そしてその三人と対峙するように座っている女性が、この『桃中家荘』の管理<sup>メン</sup>人である。

年の頃は四十代ほどで茶色の髪を後ろでまとめた恰幅の良い女性なのだが、その顔は不機嫌そのもの。

周りから見れば『やんちゃな兄弟を叱り付ける母親の図』という風に見える

あながち、その表現は間違っていない。

彼女の名前は『ビッグ・ママ』通称『ママ』。無論、本名ではない。

「話は聞かせてもらったよ」

と言つて一枚のディスクを取り出した。

歩と駆はそれに見覚えがあった。彼ら三つ子の初仕事の際、進が余計に盗んだものだ。

「えー、と『ママ』？それはその」

駆が恐る恐る口を開くが、それを『ママ』は視線で制する。

「もうそのことで、とやかく言う気はないさね」

ここでちらりと進に視線を向ける。

「このバカたれも反省してるみたいだしね」

正確には反省させられたのだが。

うめき声とともに進が面をあげた。

「うつ、痛えよ『ママ』、…あれお前らいつ来たんだ？」

「気付いてなかったの？」

「何のことだ？」

「『ママ』手加減してあげて。これ以上バカになられたら困る」

「ちょうどいいクスリさね」

まだ痛いのか、頭をさする兄をいろんな意味で心配する妹弟。

ちなみに『ママ』がやったことはただの拳骨だったのだが、やけに痛かった印象を進は受けた。

話が一段落ついたところで、駆がやおら切り出した。

「で、『ママ』なんで僕達を呼んだの？」

「もしかして仕事？」  
ビジネス

「ンなわけあるかね、全く……」

歩の、期待に満ちた言葉を『ママ』は切って捨てた。

『ママ』こと『ビッグ・ママ』はこのアパートの管理人の他に、  
フィクサー  
仲介屋の一面を持つ。

フィクサー  
仲介屋とは進たちのようなフリーランスの便利屋などに仕事を斡旋する職種のことで、バイト感覚でやれる小さな仕事から、大きいものなら超大手企業からの依頼がある。

前回の仕事は中々難度の高い仕事であった。

「そう簡単に大きい仕事ヤムが回ってくるなら苦労はしないさね」

『ママ』は肩をすくめ、話を続ける。

「ま、依頼人を選ばなきゃ多少はあるんだがね」

兄弟たちはある特定の依頼人からしか仕事を引き受けないようにしていた。

「わりいけど『ママ』、俺らさ」

「わかってるよ」

申し訳なさそうに口を開く進を、いつもの厳しく、しかしどこか

優しい口調でたしなめる。

「アンタらの目的を叶えるには企業家、それも超十社メガテン・コーポに属する企業家がベストだからね」

そう、彼らは企業家からの依頼しか受けられないようにしていた。  
超十社メガテン・コーポとは、実質的に世界を牛耳る超大手企業のことである。詳しい話はいずれ記述するとして。

「今回呼んだのは、このディスクの中身のことさね」 先程取り出したディスクを指差す。

「なんか解ったの？」

歩が興味本位で軽い気持ちで尋ねる。

しかし『ママ』の返事はそれとは正反対で重いものだった。

「全く、とんでもないものを盗って来たもんだね」

ッ!!

三人、ほぼ同じに息を飲む。

「こいつは、あの超十社メガテン・コーポが「H2コーポレーション」の機密文書さね」

三人に、緊張が走る …

「ジョーダンだよ」

そして一気に抜ける。

「『ママアアアッ』!?びっくりさせるなよおおお!?!」

進は思わず絶叫してしまった。…まあ、無理もないが。

「だよねえ。進の手に届く場所にそんなモンあるワケないかあ」  
歩は逆にどこか納得した様子だ。

駆はただ無言で机に突っ伏した。ただ全身から『驚かせないで』  
オーラが漂わせているが。

三者三様の反応を見てからからと笑う『ママ』。

「いいかい、お前たち。今回はジョーダンでした、ですんだけど次  
もそうとは限らないんだからね」

『ママ』の言葉に三人とも静かに耳を傾ける。

「困るのは自分だけじゃない。他のメンバーにだって迷惑がかかる  
んだからね」

その言葉に三人とも頷く。

「あと仲介屋の私も」

「あ、それなら良いジャン」

ゴンッ!!

「なんか言ったかい？」

「い、いいえ。言ってません」

進、本日二度目の拳骨。

「ま、とにかく話はこれでお仕舞いさね。次仕事が入ったら連絡入  
れるよ」

「はい、そこんところよろしく」

最初に歩が立ち上がり、続いて進も立つ。

「『ママ』、さっきのディスクどうするの？」

最後に立った駆が尋ねる。

「私が預かっておくよ。文句はないね」

『ママ』の言葉に何か言いたげな駆であったが、結局何も言わず  
に、先に出ていった兄妹に続く。



「駆」

それを『ママ』が呼び止める。

「冗談で残念だったかい？」

「……どうして、そう思うの？」

駆は何の動揺も無しにそう言ってみせた。あくまで表面上は。

「もしこのディスクがその機密文書とやらなら、交渉次第で何にでも化けるからねえ」

「例えば市民ID三人分、とか？」

駆は、冗談っぽくそう言った。

市民ID獲得は駆たちにとって悲願であり、何に代えても手に入れない代物なのだ。

「流石に超十社を敵には回せませんよ」

出来れば穩便に片付けたいですね、と付け加えて管理人室を後にした。

復活！誤変換シリーズ！ とやかく言う気はない、x戸谷かく異浮  
きはない。 いつ来たんだ、x五木丹だ おかしい、新しいケー  
タイなのに……。それはさておき。来週から『Joyful・Jo  
ker』お休みします。今まで読んでくださった方々には申し訳あ  
りませんが！でも！必ず戻ってきます！休む理由は、コレとは別に  
書きかけの話があるから、なんです。 では、ロドリゲスでした  
！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1714d/>

---

Joyful Joker

2010年10月15日23時43分発行